

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 640 号] 2015 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 640

October 2015

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

〈3.11 被災地訪問演奏=福島県・南相馬公演〉

## 南相馬の演奏会後のM氏とのやりとり

村山 英司 (団員：テノール)

M氏は仙台の大学教授で専門は物理学です。大学時代からの友人であり、バロック音楽、とくにバッハについては彼によって開眼させられました。自己流ですがギターやフルートを操り、今もリコーダーに凝っているようです。彼の娘さんが以前に当合唱団の《マタイ》を聴いてよい印象を持ったこともあり、今回南相馬の定演を聴きに来てくれました。以下では、「」内は彼の語った感想をそのまま書いており(本人の了解済み)、その間の多分にかみ合わないやりとりに私の感想をさしはさんでいます。

初めて我々の演奏を聴いて、どんな感じ？

「ご苦労様。なかなか良かった。演奏の完成度も高く聴き応えがあった。ゆったりとしたテンポで抑揚がある(指揮者の思いがこもった)一昔前のバッハの演奏スタイルでしたね。ソリストが、張り切り過ぎているのか、うるさく感じましたが、合唱とオケはバランス良く響いていました。」

とくに、今回のモテット3番《イエス よろこび》は、シュヴァイツァーによれば生と死に関するバッハの説教とされるくらい宗教色の強い曲です。私はキリスト教の信者ではありませんが、教義問答に近いような内容を自分の思いと合体させ日本語として発するようなことを目指したつもりでしたが、結果として、ひとつの迫力のようなものが合唱団の歌として出たような気が歌い終わったとたんになりました。昨年の夏以来、断続的に歌い込んできた成果ともいえます。それが演奏会の直後の「モテットがよかった！」というあなたの感想とマッチして、すごうれしかったです。

「日本語で演奏され、語彙の概念や言い回しを聞き取れても、所詮、21世紀の日本に住み学んでいる私にはなにも訴えるものがありません。音とその構築だけでバッハは十分楽しめるのではないのでしょうか。カンタータには物語があるので筋書きを知っておくことは良いかもしれません。聞いているだけではわからない能や狂言を楽しむのと似た状況ではないか。全体として結構楽しめましたし、またチャンスがあればぜひ聴きに行きたいと思っています。合唱は合奏に比べるとアマでも完成度を上げられる。つづけてください。」

「それから、ついでもあったので放射線測定器を車につんで行きました。南相馬から飯館村、川俣村、伊達市まで道沿いの線量測定。南相馬市街をですとすぐに1マイクロシーベルト、いたるところ縄張りをして除染作業が行われていた飯館村では10マイクロシーベルト近い場所が道路のすぐ脇に点々と残っていました。まだかなり厳しい状況ですね。40年間放射線作業従事者として法律で飲食が禁止されている管理区域で仕事をしてきた。1マイクロシーベルトあるとかなり注意深く慎重な作業になる。そんな場所に自動販売機が置いてあり大勢の作業員が普通の作業服で除染作業。この国の「法の支配」は口先だけか！学生時代ながめた国後島と同じくらいの面積が治外法権状態になってしまったなあ、という感想もありました。」

音程と発声を重視するあまりに、歌の中身が無いきれいなだけの演奏が流行る傾向にあります。特に外国曲の原語演奏ではそれが顕著ですし、近年多くなった各パート一人の合唱ではテンポアップが激しく、絡み合いは明瞭ですが自己主張が強くなり、中身は？という演奏も多々あります。私もつい最近まで合唱の根幹として音程とリズムくらいはもうちょっと何とかならないかと思っていました。その先に種々の表現(楽想?)がついてくるのかな、という感じですが、今回のモテットを経て、その辺は並行作業、あるいは想いが先行してもよいのかなという気がしています。

「宗教音楽は短い言葉を繰り返す。たぶん17、18世紀の人々には響くものがあったのでしょう。バッハは上手に教会を踏み台にして素晴らしい作品を生み出していったと思っていますが、決して敬虔ではなかった。時代によって、社会状況によって、演奏する人の学んできたものによって変わるので決定版はないでしょう。最後まで残るのは音の構築物である楽譜だけだと思うのですが。」

昨夜もテレビでサントリーホールでの鈴木雅明の《口短調》をやっていましたが、最高の宗教曲と大ホールという取り合わせには最後まで違和感がありました。古楽器の演奏や訓練された合唱は最高レベルであり興行的には大成功でしょうが、BCJはもっと深い演奏を目指していたのでは、と感じました。彼らのホ

ームグラントの神戸松蔭女子学院のチャペルのような場でやれば、ずっと違った演奏になると思います。

当合唱団の日本語演奏に対して、大村先生のパイオニアとしての方向性は高く評価するが、枝葉末節として改善の余地が有る、と私は考えています。

「すごい人ですね、伝わってきました。」

## お・た・よ・り

佐々木 まり子 (アルト独唱)

こちら岩手路はすっかり秋めいてまいりましたが、先生もお疲れも出ず、お元気のことと思います。

南相馬でのコンサートでは、大変お世話になりました。バツハ合唱団の想い、藤澤様はじめ南相馬の方々の、今回の演奏会への高く熱い意識が、合同演奏では特に結実していて、双方の“花”が本当に美しく咲いたすばらしい演奏会だったと思いました。

私も9月22日に大船渡で開かれる「星野富弘詩画展」にて、盛岡の女声合唱団で応援に行きます。被災地は復興の足音は各地それぞれの条件の中で前を向いていますが、心、想いを支えて、寄り添うことはこれから大切です。“音楽”には、目に見えない大切なものに私たちを向けさせてくれる力があります。ますますバツハ合唱団の活動が用いられますようお願いしております。皆様にどうぞよろしくお伝えください。

[岩手県盛岡市]

坂田 和泉 (ヴァイオリニスト)

南相馬公演、成功おめでとうございます。帰りの駅で、お客様に、「よかったですよ」と声をかけていただきました。

急に秋めいてきましたが、夏のお疲れが出ませんようご自愛くださいませ。

[東京カンタータ室内管弦楽団ではコンサートマスターを務めた]

## バツハの絵画的表現と日本語歌詞

山本 弘史 (団員:バス)

夏も終わった感のある今日このごろです。

今年は南相馬に行けて良かったです。これもバツハ合唱団のお蔭と感謝いたします。先生からは、ご指導をありがとうございました。

モテットは、少し理解していましたが、カンタータは、私は理解不足でした。コラールだけで精一杯でした。先生のカリスマ的指揮と、プロアンサンブルにより、また実力独唱陣のお蔭で曲になりました。

演奏会后、FMで81番をやっていました。ガーディナー指揮でしたが、これを聞き、遅ればせながらよ

うやく私はわかりました。絵画を見るような演奏でした。多くの方がとうに理解していらっしゃると思いますが、私の感想、ということで書いてみます。

カンタータ第81番、第1曲〈アルト・アリア〉のシ・ド・シという出だしは、「眠い」ということなのです。アルトの下行も、「眠い」感じですが[東京の練習では“まどろみ”のテーマとして言及された]。

なぜリコーダーなのか。リコーダーは、死を表現するときに使われ、天国とつながっていることを表わすため、縦の笛なのです。「眠り」とは、ある意味、肉の眠さですが、「死」の予見でもあります。だからリコーダーなのです。

第3曲〈テノール・アリア〉は、波の泡です。第5曲〈バス・アリア〉の16分音符を、ガーディナーは、極端なクレッシェンドで表現し、聞いただけで、荒波が高まると、分かりました。バツハの見事さです。荒波にも、“いかなる 災いも”(大村訳)と歌う歌は、まさに、今の福島です。原発の中で生きる私たちへのメッセージです。恐ろしい原発と放射能のなかで、眠り、そして波を鎮める主イエスこそ“わが喜び”。すばらしい。……ここまで理解して歌うべきでしたが、勉強不足で、すみませんでした。

絵画的ともいえるバツハのカンタータ。おそらくブクステフーデも、誰でも、みんなやっているでしょう。しかしバツハが一番見事でしょう。東京バツハ合唱団の解釈・演奏が、さらにいつそう深化し、ますますしっかりと聴衆の心をつかんでいきますよう、お祈りいたします。

すばらしい日本語歌詞をありがとうございます。音楽界、キリスト教界の一大財産です。先生、お元気でさらなる歩みをお続けください。

[山形県東根市、医師。このたびの南相馬公演に団員として参加。東京での練習にもたびたび出席した]

## 連載・新刊紹介 <第2回>

どんな国家に生きたいのか、

これからの世界を描く一助に

大村 恵美子

エマニュエル・トッド著

『ドイツ帝国』が世界を破滅させる

—日本人への警告—

(堀茂樹訳、文春新書、2015年5月刊)

前回、「どんな国家に生きたいのか、これからの世界を描く一助に」と題して、連載を開始しました(「月報」第638号・2015年8月、増ページ別冊)。

以下3回に分けて載せる予定です（なお、今回もまた、アルト団員の白井昭子さんがワープロ原稿に入力してくださいました。丹念なお仕事に感謝しています）。

#### エマニュエル・トッド (Emmanuel Todd)

1951年生まれ。フランスの歴史人口学・家族人類学者。国・地域ごとの家族システムの違いや人口動態に着目する方法論により、『最後の転落』（1976）で「ソ連崩壊」を、『帝国以後』（2002）で、「米国発の金融危機」を、『文明の接近』（2007、共著）で、「アラブの春」を次々に”予言”。『デモクラシー以後』（2008）では、「自由貿易が民主主義を滅ぼしうる」と指摘。

### 1. ドイツ

最近のドイツのパワーは、かつて共産主義だった国々の住民を資本主義の中の労働力とすることによって形成された（p. 39）。

ドイツはロシアに取って代わって東ヨーロッパを支配する国となったのであり、そのことから力を得るのに成功した。アメリカのおかげで、ドイツにとって、軍事的支配のコストはゼロに近い（p. 41）。

ドイツが中心にあり、さまざまな衛星国や自主的隷属状態の国が、まわりに位置している（p. 42）。

ヨーロッパの産業領域を見ると、低賃金のゾーンに大きな発展の余地が存在する。たぶんこの不均衡を利すれば、ドイツはアメリカの産業システムを死に追いやることのできるだろう（p. 55）。

#### ドイツ専用のデモクラシー

その中心には、支配者たち専用のドイツ・デモクラシーがあり、そのまわりに「……」諸国民のヒエラルキーが形成されている。ドイツ人たちを人種差別時代のアメリカにおける白人たちのように見ることができよう（p. 66）。

#### 力を持つと非合理的に行動するドイツ

歴史的に確認できるとおり、支配的状況にあるとき、彼らは非常にしばしば、みんなにとって平和でリーズナブルな未来を構想することができなくなる。この傾向が今日、輸出への偏執として再浮上してきている。

あの国「ドイツ」のエリートたちはロシアとの関係において、好意と紛争の間で絶え間なくためらい、揺れ、心理的・歴史的なある種の「二極性」の症状を呈しています（p. 109）。

ドイツ人たちは平和主義と経済的膨張主義の間で迷っている。アメリカ人たちは帝国路線とネーション路線の間で揺れている。そしてフランス人たちは、この混迷の中でどこに身を置けばよいか本当に分からなくなってしまっている（p. 119）。

「仏独カップル」の挫折の後、一抹のアイロニーを込めて言うのですが、私は「米露カップル」がうまくいくかどうか試してみたいと思います（p. 123）。メ

ルケルよりも、その背後のドイツ経済界こそが、ユーロ圏が吹っ飛んでしまうのを嫌がっている（p. 140）。

彼ら「ドイツ人」が未だに思い到らないのは次のことです。つまり、ドイツはフランスとは異なるけれども、強みと弱みを持つ正常な国だということ。ドイツは、単一通貨の考案者たち——彼らはフランス人でした——の過失により、支配的なポジションに置かれてしまったのです（p. 153）。

一方、ドイツの態度は申し分なく一貫しています。ドイツは、それが可能なときには毎度、地中海におけるフランスの行動に立ちほだかろうとします（p. 154）。ドイツの文化的土台は普遍的人間という理念ではないのです。ドイツ人にとっては、文化は国や地域で大きく異なる、そしてそれぞれの経済的適性も異なる、と考えるのが自然なのです（p. 155）。

世界のすべての先進国社会に共通する特徴の1つは、人口の1%を占める最富裕層が、銀行システムと金融活動に強く結びついたグループとして出現しているということです。ひとつの新しい関係がフランスの1%とドイツの1%の間に定着しつつあります（p. 167）。

ドイツ嫌いとはドイツ崇拜はドイツを大真面目に捉え過ぎる傾向の2つの様態であり、このことは問題を悪化させる方向へ働きます。仲良しではあるが批判的でもあるフランスというパートナーを失って、ドイツは自らの社会経済モデルの自讃に閉じ籠もりました。いま緊急を要するのは、ドイツを褒めそやしてイケイケにすることではなく、ストップすることです（p. 190）。

私は自由貿易体制の中ではユーロは死に体だと言っているのです。喫緊の問題はユーロではなく、債務危機です。主権国家の政府債務が返済されることは絶対にないのです。われわれには2つの可能性があります。「輪転機を回す」か、債務のデフォルトを宣言するかです。債務デフォルトは、民主主義的な理想によって国家を再征服する端緒となるでしょう。現状では、国家は金融寡頭支配層によって略奪され、金を脅し取られています（p. 194）。

ドイツは歴史上、支配的なポジションについてきたときに変調しました。特に第一次世界大戦前、ヴィルヘルム2世の統治化でビスマルク的理性から離れ、ヨーロッパでヘゲモニーを握ったときがそうだった。今日の状況は、ナチス勃興の頃よりも、あのヴィルヘルム時代のほうに類似しています（p. 212）。

ドイツは高齢化しており、8000万人の人口の若返りがうまくいっていません。文化的にも十全ではありません。産業力もとどのつまりは、中級レベルのものであって、輸出力が途轍もないとはいえ、技術の面で、たとえば日本レベルには遠く及ばない。要するに、ドイツを理性へと導くのは難しくないのです。しかし、フランスの指導者層がノイローゼにかかっている、ドイツの前で躓いてしまう（p. 213）。

こうして、問題は歴史のむごい再来という形をとって現われてくる。ヨーロッパシステムにおけるデモクラシー退化の中心的なファクターは、実はドイツではないでしょうか？ (p. 215)

結局、私はみなさんに、フランスにとって喜ばしい物語を提示できるのですよ。ただちにではなく、ユーロの失墜から1年後に始まる物語です。一方、ドイツは事態にそう簡単には対応できないでしょう…… (p. 217)。

## 2. フランス

第二次世界大戦の地政学的教訓があるとすれば、それはまさに、フランスがドイツを制御し得ないということである。ドイツが持つ組織力と経済的規律の途轍もない質の高さを、そしてそれにも劣らないくらいに途轍もない政治的非合理性のポテンシャルがドイツには潜んでいることを、我々は認めなければならない(p. 28)。

フランスは人生というものについて、よりバランスがとれていて満足のいくビジョンを持っていると、たぶん認めるべきなのだ。しかし、ここで問題なのは形而上学でもモラルでもない。われわれは国際的な力関係の話をしている。もしある国が工業と戦争に特化したら、それをきちんと考察し、そしてどのようにしたらその経済的・技術的な特化とパワーの突出をコントロールできるのかを検討しなくてはならない (p. 30)。

ドイツは、フランスの協力なしにはけっして大陸の支配権を握ることはできなかつただろうと思う。

フランスにはもはや夢がない。[……]フランスが希求していることといえば、服従すること、模倣すること、そしてタイムカードを押すことくらいなのだ (p. 45)。

フランスの屈従は未来の歴史家たちの目には、ドイツに将来訪れる精神的アンバランスへの根本的に重要な貢献と映るだろう (p. 46)。

一フランス人として、もしドイツの覇権かアメリカの覇権か、どちらかを選べといわれたら。私は躊躇なくアメリカの覇権を選ぶ (p. 49)。

ユーロに関して今日明らかなことは、言語、構造、メンタリティの面で共通点が結局ほんのわずかしかない多様な社会が積み重なっている中では、この通貨はけっして機能しないということです。他方で、私の目に明らかなのは、ユーロ圏とその破壊的ロジックを打ち砕くことができそうな唯一の国はフランスだということです。が、私は断念しました。自らの失敗の現実を直視し、別の考え方を採用する能力のある政治的エリートは、今日のフランスにはいません (p. 126)。

フランス文化の偉大さは普遍的人間という概念を提示し、堅持するところにあるのですが、その大きな弱点は、ほかでもないその普遍主義のゆえに、さまざま異なる社会を異なるままに分析する能力に欠けるという点にあります (p. 149)。

今後この 0.1%の超富裕層が権力を掌握し続けるか、それとも、国外へ出なければならなくなるか、フランスは今この危機に直面して、その元々の性質であり力であるもの、すなわち自由と平等の価値に立ち帰る寸前なのではないでしょうか (p. 171)。

同じひとつの階級が市場と諸国家をコントロールしている以上、市場と国家の間の対立にはもはや何の意味もありません。最富裕者たちには、彼らの人質は、コツコツと貯金する庶民たちなのです。社会の上層部への金銭の過剰な蓄積はこの時代の特徴のひとつなのです (p. 176)。

第二次世界大戦後の社会的国家、ドゴール主義の国家は、[……]何よりも一般意志の実現のために行動していました。経済成長をみんなのために管理していました。今日、国家は、[……]何よりもまず階級国家です。金融資本主義が改めて諸国家をコントロールするようになっていきます。1990年以降、金融取引の開放とその金融フローの自由化が実際に不平等を信じられないほど増大させました (p. 177)。

寡頭支配層こそが、そして寡頭支配層が国家との間に持っている関係こそが、本当の問題なのです(p. 178)。

フランスには、金融勢力を打ちのめすべく独創的なやり方で国家を用いることのできる平等の国として、改めて浮上する可能性もあります (p. 208)。

自由貿易は諸国民間の穏やかな商取引であるかのように語られますが、実際にはすべての国のすべての国に対する経済戦争の布告なのです。自由貿易はあのジャングル状態、今ヨーロッパを破壊しつつある力関係を生み出します。そして、国々をそれぞれの経済状況によって格付けする階級秩序に行き着いてしまいます。ですから現段階で、私の選択はヨーロッパ保護主義によるユーロの救出ということになります。必要なことはしたがって、フランスがこの解決策を提示してドイツと交渉する勇気を持つことです (p. 217)。

### もし私がフランス大統領だったら……

①欧州の保護主義的再編成について、ドイツ相手にタフな対話を始める。②主要銀行を国有化する。③政府債務のデフォルトを準備する。④国民教育相統括下の学校制度に新たに10万のポストをつくる (p. 221)。

我々に必要なのは強力な意識化であって、社会全般にわたる革命的な転覆ではありません。私はエリートたち(指導者的階層)が理性に立ち返るように闘っているのであって、彼らの地位の転覆を狙っているのではないのです (p. 222)。

上層階級が私にとって許しがたいのは、その階級の連中が発狂し、無責任になるときです。偉大なデモクラシーはすべからず、エリートの一部が自らの任務を果たすという契約を受け入れ、ときには民衆の側につくという仕組みに基づいて成立するのです(p. 223)。

<つづく>